

オオミズクサハムシ *Plateumaris constricticollis* (Jacoby)

【選定理由】

東北日本と日本海側に偏った分布をする本種にあって、本県の生息地は飛び地的な存在である。東京以西の太平洋側では唯一の産地であるが、生息基盤が極めて貧弱である。形態的には、岐阜北部から富山県にかけて分布する亜種トヤマオオミズクサハムシと、中国山地に分布する亜種チュウゴクミズクサハムシの中間的な特徴をもち、両者をつなぐ存在として学術的に貴重である。

【形態】

ネクイハムシ類では最大の種で、北日本に分布するものでは12mmを越えるが、県内の個体群は小形で8~10mm。金銅色で、触角は黒色。腹部第1節はそれ以降の節の和より短く、前胸背には皺がない。

【分布の概要】

【県内の分布】

面ノ木峠(豊田市~設楽町)周辺(長谷川・吉富, 1998)。

【国内の分布】

北海道、本州に分布する。分布は日本海側の山地に偏る傾向があり、特に中部以西では局所的。糸魚川-静岡構造線より西側の本州中央部(富山県・岐阜県・愛知県)、中国山地(兵庫県・岡山県)。

【生息地の環境/生態的特性】

ヤマドリゼンマイ、オオバギボウシ、サワアザミ、ハンノキなどが自生する山地の湿地。成虫は6月頃出現し、スゲ類、ハンゴンソウ、オオバギボウシなどの葉上に見られる。幼虫は地中でスゲ類の根を食べる。成虫は富山県や中国山地の個体群ではスゲ類の花あるいは葉を食べているのが観察されているが、北海道や長野県北部などの個体群では成虫期には摂食しないのではないかと考えられている。県内では後食植物は確認されていない。

【現在の生息状況/減少の要因】

面ノ木峠周辺の湿地2ヶ所から確認されている。そのうち、初めに確認された生息地の環境は、発見当時(1997年)と表面上大きな変化はない。長期的には温暖化(あるいは乾燥化)と山地の湿原の減少が本種の減少の要因になると考えられる。

【保全上の留意点】

生息地の湿原は、現在設楽町の天然記念物として湿地植物の保護施策がとられている。現在の状態の維持と、周辺部の森林を含めた保全策が執られ続けるられる限り絶滅の心配は当面のところないと考えられる。

【特記事項】

林(2004)は、本種をエゾオオミズクサハムシ、シナノミズクサハムシ・トヤマミズクサハムシの3亜種に分類し、本個体群をトヤマミズクサハムシ *P. c. toyamaensis* としている。

【引用文献】

長谷川道明・吉富博之, 1998. 愛知県のネクイハムシ類. 豊橋市自然史博物館研究報告, (8): 41-48.
林 成多, 2004. 総説・日本のネクイハムシ亜科. ホシザキグリーン財団研究報告, (7): 29-126.

【関連文献】

野尻湖昆虫グループ, 1985. 日本のネクイハムシ. 野尻湖昆虫グループ.



設楽町, 2006年6月, 長谷川道明 撮影

県内分布図

